

乳幼児をもつ母親および父親が体験する 育児困難と育児支援サービスへの要望

大沼珠美、桑名佳代子、桑名行雄、長友純子¹⁾、坂上明子²⁾

宮城大学看護学部

キーワード：乳幼児期、育児困難、育児支援、母親、父親

要 旨

宮城県S市における乳幼児の母親と父親を対象とした育児ストレスに関する質問紙調査から、自由記載項目の内容を分析し、直面する育児困難と育児支援サービスへの要望を分析した。4か月群における育児困難は、母親と父親ともに、上位に「児の泣きに関すること」(16.9%、36.0%)、「児の病気や症状に関する知識や対応」(15.2%、19.0%)があげられており、18か月群の母親では「育児・家事・仕事の両立」、「育児ストレス」が多かった。育児支援サービスに対しては、4か月群の母親では保育所に関する要望が最多で(16.0%)、次いで公共施設の設備であり、18か月群の母親では託児(26.2%)、保育所であった。父親では、両群ともに経済的支援(18.8%、20.3%)への要望が高く、自分がより育児に関わるためには労働時間の短縮、労働条件の改善を求める意見が多かった。

Childcare Difficulties Experienced by Mothers and Fathers with Infants and Their Requests for Childcare Support Services

Tamami Onuma, Kayoko Kuwana, Yukio Kuwana, Junko Nagatomo¹⁾, Akiko Sakajo²⁾

Miyagi University School of Nursing

Key Words : early childhood, childcare difficulties, childcare support, mother, father

Abstract

We examined free text comments that respondents wrote on questionnaires about childcare stress distributed to mothers and fathers with infants in S City, Miyagi Prefecture, Japan, and we analyzed the childcare difficulties they face and their requests for childcare support services. Both mothers and fathers with 4-month-old infants ranked the following childcare difficulties high on their list: "difficulty with my child's crying" (16.9%, 36.0%), and "difficulty in regard to knowledge of my child's diseases and symptoms and how to cope with them" (15.2%, 19.0%). Many mothers with 18-month-old infants reported the following childcare difficulties: "difficulty raising children and working and doing house chores at the same time", and "difficulty with childcare stress". In terms of childcare support services, mothers with 4-month-old infants made requests for nursery schools most often (16.0%), followed by requests for facilities at public institutions; mothers with 18-month-old infants requested day nurseries most often (26.2%) and then nursery schools. Fathers with 4-month-old children and fathers with 18-month-old children expressed high expectations for economic support (18.8%, 20.3%), and many of them expressed the opinions that shorter working hours and improved working conditions should be provided so that they could be involved in childcare.

1) 元宮城大学看護学部

Ex-Miyagi University School of Nursing

2) 愛知医科大学看護学部

Aichi Medical University College of Nursing

I はじめに

近隣付合いの希薄化、核家族化が進み、女性の社会進出とともに家庭における育児には多様なニーズが生じてきている。平成11年12月には少子化対策の具体的実施計画（新エンゼルプラン）¹⁾が策定され、自治体では在宅児も含めた保育サービスや仕事と子育ての両立のための雇用環境の整備など多種多様な事業に取り組みは始めている。そこで、実際に乳幼児を養育している親が抱えるニーズを把握し、今後のよりきめ細かな育児支援について検討したいと考える。

筆者らは、乳幼児期における母親および父親を対象として母親役割・父親役割に対する認識と育児ストレスに関する調査を行った²⁾。この自記式の質問紙調査の中から、母親と父親が養育のなかで体験している育児困難さとそれへの対処を明らかにし、さらに育児支援サービスへの要望を把握するために、自由記載項目の内容を分析したので報告する。

II 方 法

1. 調査対象

宮城県S市の保健福祉センター2施設において開催された3、4か月児育児教室に参加した児の母親336名とその父親、および同市の保健福祉センター5施設における1歳6か月児健康診査を受けた児の母親346名とその父親を対象とし、調査に同意が得られたものである。以下、3、4か月児育児教室に参加した児の母親とその父親をそれぞれ「4か月母親群」「4か月父親群」、1歳6か月児健康診査を受けた児の母親と父親はそれぞれ「18か月母親群」「18か月父親群」とする。

2. 調査方法と期間

3、4か月児育児教室に参加した母親に調査の趣旨、方法を説明し、調査に同意が得られた者に母親用の質問紙を配付した。父親への調査依頼は、趣旨を説明した協力への依頼書を調査書に同封して母親に手渡した。質問紙への回答は、自宅にて父親、母親が別々に無記名による記入とし、約1週間後に郵送による回収を行った。同様に、1歳6か月児健康診査に訪れた母親で調査に同意の得られた者に、母親用と父親用の質問紙を配付した。

回収方法は同様である。

調査期間は、4か月群は2000年2月～4月、18か月群は9月～10月であった。

3. 調査内容

自由記載とした調査項目は、4か月母親群、4か月父親群ともに、①今回の児の育児において最も困ったこと・つらかったこと、②その対処方法、③育児を支援するサービスについての意見・要望、についてとした。

18か月母親群については、18か月児を育てている現在において、育児の中心を担っている母親自身が困難と感じる事項を記述してもらうために、①子どもや母親自身のことで困っていること、との設問とした。さらに、②育児を支援するサービスについての意見・要望、についての設問である。

18か月父親群については、先行に実施した4か月児の父親を対象とした調査³⁾から、育児への関わりが現実には社会的要因に大きく影響されているという結果を踏まえ、①育児に関わるために生活（仕事を含む）がどのように変化すればよいと考えるか、という質問を設け、さらに、②育児を支援するサービスについての意見・要望、について問うものとした。

4. 分析方法

5人の共同研究者によりKJ法⁴⁾を参考にし、4か月母親群、4か月父親群、18か月母親群、18か月父親群ごとに回答の内容分析を行い、内容ごとに1データとして類似性により分類した。4か月母親・父親群において、「最も困ったこと・つらかったこと」の設問に対して複数の回答を記載したものは、回答のすべてを分析対象とした。

III 結 果

質問紙は、4か月母親群は245部が回収され（回収率72.9%）、4か月父親群は211部（62.8%）、18か月母親群は200部（57.8%）、18か月父親群は198部（57.2%）であった。回答に不備があったものを除き、4か月母親群については244部（有効回答率72.6%）、4か月父親群は198部（58.9%）を分析対象とし、18か月群では母親、父親ともに回収した全てを分析対象とした。

1. 対象者の背景

母親の平均年齢 (SD) は4か月群では30.2 (±4.2) 歳、18か月群が31.3 (±4.3) 歳で、父親は4か月群が32.0 (±5.3) 歳、18か月群が33.8 (±5.9) 歳であった。職業をもつ母親は、4か月群が22.1%であり、18か月群では18.0%であった。子どもの出生順位は、どの群でも第1子が半数をやや超えており、家族形態は核家族が85%前後であった (表1)。

表1 対象者の背景

	母親群		父親群	
	4か月 n=244	18か月 n=200	4か月 n=198	18か月 n=198
年齢	30.2±4.2歳 (21~40歳)	31.3±4.3歳 (21~42歳)	32.0±5.3歳 (19~47歳)	33.8±5.9歳 (21~60歳)
職業	主婦 190名 (77.9%) 常勤 37 (15.2) 非常勤 7 (2.9) 自営業 10 (4.1)	主婦 164名 (82.0%) 常勤 25 (12.5) 非常勤 9 (4.5) 自営業 2 (1.0)	会社員 143名 (72.2%) 公務員 33 (16.7) 自営業 10 (5.1) その他 10 (5.1) 無業 2 (1.0)	会社員 150名 (75.8%) 公務員 16 (8.1) 自営業 15 (7.6) その他 12 (6.1) 無業 2 (1.0)
子どもの性別	男 133 (54.5) 女 109 (44.7) 不明 2 (0.8)	男 120 (60.0) 女 80 (40.0)	男 113 (57.1) 女 85 (42.9)	男 126 (63.6) 女 72 (36.4)
子どもの出生順位	第1子 133 (54.5) 第2子 83 (34.0) 第3子以降 28 (9.8)	第1子 115 (57.5) 第2子 60 (30.0) 第3子以降 25 (12.5)	第1子 105 (53.0) 第2子 69 (34.8) 第3子以降 23 (11.6) 不明 1 (0.5)	第1子 110 (55.6) 第2子 58 (29.3) 第3子以降 27 (13.8) 不明 2 (1.0)
家族形態	核家族 206 (84.4) 拡大家族 38 (15.6)	核家族 172 (86.0) 拡大家族 28 (14.0)	核家族 165 (83.3) 拡大家族 32 (16.2) 不明 1 (0.5)	核家族 172 (86.9) 拡大家族 24 (12.1) 不明 2 (1.0)

2. 質問項目への回答件数

質問項目へ回答があったのべ件数は表2に示した。「困ったこと・つらかったこと」への回答は、4か月群では母親が231件を挙げており、そのうち「対処方法」の回答は230件、父親では「困ったこと・つらかったこと」への記載が100件、「対処方法」は99件の回答であった。

18か月母親群では、「現在困っていること」への回答は58件であった。また、18か月父親群では、「育児に関わるための生活の変化」への回答は134件と多くの記載があった。

「支援サービスへの意見・要望」への回答は、4か月群では母親が188件、父親が101件であるのに対し、18か月群では母親が61件、父親が69件であり、母親、父親ともに4か月群における記載が多かった。

表2 質問項目への回答件数

	4か月群		18か月群	
	母親	父親	母親	父親
有効回答部数	244	198	200	198
質問項目	回答のべ件数 (件)			
困ったこと・つらかったこと	231	100	—	—
対処方法	230	99	—	—
現在困っていること	—	—	58	—
生活の変化への考え	—	—	—	134
育児サービスへの意見・要望	188	101	61	69

3. 4か月母親・父親群における育児困難

1) 4か月母親群の育児困難と対処方法

今回の児の育児において最も「困ったこと・つらかったこと」として回答があった総件数231件は、表3に示すように15項目に分類できた。児の『泣きに関すること』が最も多く39件 (16.9%) であり、「夜泣き」と「なぜ泣くのかわからない・泣きやまない」が半数ずつであった。

次いで多かったのは『病気や症状に関する知識や対応』と『上の子への対応』のそれぞれ35件 (15.2%) であった。病気や症状への対応として困難であった内容は、「風邪」、「発熱」、「湿疹」、「授乳後の嘔吐」、「便秘」があげられており、「初めての育児で病気になることへの不安」もみられた。また、上の子への対応で困難さを感じた内容は、「上の子を今までのようにみてやれない」としたものが16件と約半数であり、その他、「上の子のあかちゃんがえり」、「二人同時になく」、「上の子がやきもちをやく」など、上の子の対応に手が掛かるといった記載であった。

『体調不良時の児の世話』についての回答は27件 (11.7%) であり、「家族全体が風邪でダウンした」や「自分が熱を出して育児ができなかった」などのほか、慢性的な疲労や産後の体力が回復しないままで育児するつらさをあげたものもいた。さらに、『授乳に関すること』、『育児のストレス』、『睡眠不足』、『周囲の干渉』と続いた。

これらの育児困難への対処方法としては、『泣きに関すること』では、「ひたすら抱っこし

て落ち着くのを待つ」としたもののほか、「時がたつにつれなぜ泣くのかわかるようになった」や「2ヶ月目に入ったら夜は寝てくれるようになった」など、時間の経過とともに解決に向かった場合があり、また「添い寝しておしゃぶり代わりにおっぱいを吸わせた」のように対応を工夫した回答もあった。

『病気や症状』への対応は、「病院受診」のほか、「かかりつけの小児科医に電話相談した」や夫や実家の協力を得て対処していたが、発熱、嘔吐、鼻水、便秘などの症状に対しては、看護師・助産師・保健師に相談したものが2名であり、子育て相談・健康相談に電話したものが2名、インターネットの育児ページにアクセスしたものが1名であった。

『上の子への対応』としては、「下の子が寝ているときに、上の子と過ごすように心がけた」としたもののや「上の子といっしょに下の子の世話をした」など、上の子への対処を工夫しているものが多かった。

自分の『体調不良時の児の世話』以下にまとめた育児困難に対しては、夫や実家、友人等の援助やアドバイスを得て対処していた。保健医療者が関わったものは、産後の体調不良時に助産所に産褥入院したものが1名、育児ストレスにより分娩した総合病院の産科と心療内科で治療とケアを受けたもの1名であった。また、育児不安・育児ストレスにより看護師・助産師・保健師に相談したものは3名であり、そのなかの1名は保健師による家庭訪問を受けていた。

表3 4か月母親群 困ったこと・つらかったこと&対処方法

困ったこと・つらかったこと (総数231件)	実数 (%)	対処方法 (230件)
<泣きに関すること> ・夜泣き (20) ・なぜ泣くのかわからない泣きやまない (19)	39 (16.9)	・ひたすら抱っこをして落ち着くのを待つ ・時が経つにつれ、なぜ泣くのかわかった ・実家の母に助けをもらった ・おしゃぶりで、すぐ寝るようになった ・夫に相談、話を聞いてもらうことで励まされた
<病気や症状に関する知識や対応> ・病気への対応 (28) 風邪、発熱、湿疹 ・症状に関する知識 (7) 嘔吐、便秘、黄疸	35 (15.2)	・受診した・かかりつけの小児科医に電話した ・看護者に相談した ・実家に相談した ・子育て相談(健康相談)に電話した ・救急車を呼んだ
<上の子への対応> ・上の子をいままでのようにみてやれない (16) ・上の子のあかちゃんがいり (5) ・二人同時に泣く (5) ・上の子がやきもちをやく (4) ・上の子に手がかかる (2) ・上の子の病気、入院 (2) ・上の子の都合で児を連れ出す (1)	35 (15.2)	・下の子が寝ているときに上の子を抱きしめたり遊んだ ・上の子との時間を作る ・実家の援助 ・イライラしたときは夫に子どもを任せたい ・上の子といっしょに下の子の世話をした
<体調不良時の児の世話> ・自分が病気のとき (20) 風邪、発熱、臍膜炎、乳腺炎、持病の悪化 ・慢性的な疲労や産後の体力が回復しないまま育児をすること (7)	27 (11.7)	・家事の手抜き ・夫、友人に相談しストレスをためないようにした ・助産所に産褥入院 ・夫と夫の母が中心、上の子も手伝った ・実母が来てくれた
<授乳に関すること> ・授乳のリズムや回数 (9) ・母乳の分泌量 (4) ・児の吸いつき (4) ・その他 (3)	20 (8.7)	・実母にしばらく来てもらった ・周囲に相談し悟った ・搾乳した、気持ち切り替えてミルクにした ・完璧主義をやめた
<育児のストレス> ・イライラ (6) ・精神が不安定 (3) ・疲れ果てた、とにかくつらい (3)	12 (5.2)	・友人とおしゃべり、夫に子どもを預け外出 ・夫に泣きついた ・カウンセリングを受けた ・実母に相談して落ちついた
<睡眠不足>	12 (5.2)	・日中、実母に子どもの面倒を頼み昼寝する ・手間がかかるのは含み、楽しく過ごそう ・自分は子どもの世話のみ、夫がサポートした
<周囲の干渉> ・義父母と意見が合わない (9) ・周囲の期待 (1) ・人により言うことが違う (1)	11 (4.8)	・実家に相談 ・話し合う、自分の意見を言う
<寝かせること> ・遅くまで寝ない (7) ・昼夜逆転 (3)	10 (4.3)	・お風呂の時間を変えた ・夫が励ましてくれた ・あきらめた
<自分の時間がない>	9 (3.9)	・土日は夫に子どもの相手をしてもらい ・できない事は明日やる・という気持ち
<産後のサポート> ・産後のサポートがなかった (5) ・実家から自宅に戻り大変だった (2)	7 (3.0)	・子どもと一緒に昼寝した ・夫の協力
<夫の協力> ・夫の協力が得られない (3) ・夫が非協力的 (2)	5 (2.2)	・夫に多くを求めない ・夫と話す ・自分でがんばった
<仕事と育児の両立>	4 (1.7)	・周囲に相談
<母親としての自信がない>	3 (1.3)	・新生児訪問、完璧主義をやめた
<その他>	2 (0.9)	

2) 4か月父親群の育児困難と対処方法

「困ったこと・つらかったこと」の総件数100件は、表4に示すとおり12項目に分類できた。『泣きに関すること』が最も多く36件(36.0%)、次いで『病気や症状に関する知識や対応』が19件(19.0%)であり、この上位2つで半数以上を占めていた。母親と同様に「夜泣き」、「なぜ泣くのかわからない・泣き止まない」が多く、「妻がいない時に泣かれて困った」としたものが7名であった。

『仕事と育児の両立』では、「子どもの世話で苦勞している妻を自分も仕事が多く、助けがあげられなかった」と妻をサポートしたいができないことや、逆に育児をするために「早く帰るようになり仕事がたまりイライラした」など

仕事と育児の両立が困難であることが述べられていた。

『子どもが増えたことの影響』では、「家族ひとりひとりへの愛情の度合いが減少した」、「同時に複数の子の世話」など、育児の負担感が増していた。これらのほか、少数ではあるものの夫に特徴的に述べられた育児困難は、『妻の育児ストレス』、『1人で児を見るとき不安』などであった。

育児困難への対処としては、『泣きに関すること』では「妻に任せる」、妻がいないときには「携帯に電話を入れ早く帰ってきてもらった」、「親のところへ連れて行った」、「対処不能」などであった。しかし、「あやしつづける」を含め、自分で対処を試みたものは10名と約3割の

表4 4か月父親群 困ったこと・つらかったこと&対処方法

困ったこと・つらかったこと (総数100件)	実数 (%)	対処方法 (総数99件)
<泣きに関すること> ・夜泣き (15) ・なぜ泣くのかわからない泣きやまない (14) ・妻がいないときに泣かれて困った (7)	36 (36.0)	・泣きやおまで見守る ・あやしたり、おむつ替えたりミルクをのませたりした ・妻に任せる ・一晩中あやし続けて何とか対処、日中は両親の助けを借りて母親が休めるように配慮した ・妻の携帯に電話して早く帰ってきてもらった ・夜通し、湯冷ましなどをのませたりして熱を下げた ・変身した ・綿棒にベビーオイルを塗って肛門に入れ便を出した ・スキンケアを大切にしている ・良い病院を探した
<病気や症状に関する知識や対応> ・病気への対応 (15) 風邪、発熱、湿疹 ・症状に関する知識 (4) 嘔吐、便秘、黄疸	19 (19.0)	・業務調整を図った ・できるだけ早い帰宅、週末は家にいるようにし、家事・育児に協力している ・子どもが寝てから夜遅くまで仕事をしている ・すべて妻と母任せ、時間ができて少しづつあやしたりするようになったが、育児はほとんどしていない
<仕事と育児の両立> ・仕事が忙しくて十分に妻をサポートできない (3) ・育児をする分、仕事がたまりストレスになった (3) ・帰宅後育児に協力し疲れた (1) ・子どもと過ごす時間が少ない (1)	8 (8.0)	・できるだけ両親で子どもの世話をする ・長女に赤ちゃんの世話を手伝わせたり ・長男を実家にあづけた
<子どもが増えたことの影響> ・家族ひとりひとりへの愛情の度合いが減少した (4) ・同時に複数の子の世話をしなければならぬ (3)	7 (7.0)	・妻の実家に頼り、子どもを行かせリフレッシュさせた ・冷静に話を聞いた ・育児を積極的に手伝った
<妻の育児ストレス> ・妻のストレス、イライラ (4) ・妻の精神不安定 (1)	5 (5.0)	・妻の実家に頼り、子どもを行かせリフレッシュさせた ・冷静に話を聞いた ・育児を積極的に手伝った
<睡眠不足> ・子どもが昼夜逆転 (3) ・夜の授乳に付き合わされる (2)	5 (5.0)	・風呂を入れる時間を変えたら自分たちのリズムになった ・ある程度寝てくれるようになるまで我慢して頑張った ・慣れた
<体調不良時の児の世話> ・家族全員で病気・風邪の時 (4) ・自分が腰痛で思うように抱っこできない (1)	5 (5.0)	・妻の実家に息子をあづけた ・辛かったが世話をした ・いつ休んでもいいように仕事をきっちりした
<一人で児を見るとき不安> ・妻が外出したときの子どもの世話 (4)	4 (4.0)	・とりあえず寝かせておいた ・黙って子どもを抱きかかえるだけ、妻の帰りを待った ・大変と感じただけで育児はできた
<授乳に関すること> ・泣かれても自分では母乳をやれない (2) ・産後夫婦だけで育児、妻の疲労が著しく夜間の授乳が困難 (1) ・哺乳瓶で飲まない (1)	4 (4.0)	・自分では母乳をあげられないとき、上の子が悲しまないように自分なりにがんばった ・笑顔を絶やさず常に我慢していた
<子どもとの愛着形成の障害> ・生後なかなか会えなかった (2) ・自分のことを父親と思っているのか分からない (1)	3 (3.0)	・交通費を惜しまず会いに通った
<入浴に関すること> ・お風呂で便をした (1)	1 (1.0)	・風呂の掃除をした
<その他> ・経済的な負担増 (1) ・自分の時間がない (1) ・朝ご飯を妻がつくらなくなった (1)	3 (3.0)	

父親であった。

『病気や症状に関する知識や対応』では、ほとんどの父親が「よい病院を探した」、「専門書を調べた」、「タウンページの緊急ダイヤルに電話した」、「夜通し、湯冷ましを飲ませたりして熱を下げた」など、冷静に対応している記載であった。

『仕事と育児の両立』では「業務調整を図った」り、「できるだけ早く帰宅し、週末は家で家事・育児に協力」していた。また『妻の育児ストレス』へは「妻の実家に子ども2人を行かせ、リフレッシュさせた」や「妻の話を聞いた」、「夫婦で話し合い、自分の家なりの基準を設けて理想に近づけようと努力している」など、妻に協力的な対処であった。

4. 18か月母親群における現在の育児困難

「子どもや母親自身のことで困っていること」の記載は58件であり、表5のように12項目に分類できた。上位5項目『育児・家事・仕事の両立』、『育児ストレス』、『母親としての自信のなさ』、『上の子に関すること』、『周囲の干渉』は6、7件ずつの回答であり、どれも母親自身の育児に関することであった。

『育児・家事・仕事の両立』では、「子どものことの心配はないが、育児・家事・仕事と両立させていく上で気持ちの余裕のなさを感じる」、「仕事のストレスがたまるとちょっとした事で怒ったり、大声をあげたりと子どもにあたっている時がある」と、仕事が育児へ与える影響について記載していた。また、仕事をする事に夫の理解が得ら

表5 18か月母親群 子どもや母親自身のことで困っていること

子どもや母親自身のことで困っていること (総数58件)	実数	(%)
< 育児・家事・仕事の両立 > ・ 仕事のストレスで子どもを叱ってしまう (2) ・ 仕事が生かす子どもの睡眠時間等の生活リズムに影響する (1) ・ 育児・家事・仕事の両立の上で気持ちに余裕がない (1) ・ 愛情が足りているか心配 (1) ・ 仕事をするために夫の協力が得られない (1) ・ 仕事をしたいが保育園の空きがない (1)	7	(12.0)
< 育児ストレス > ・ イライラして怒鳴ったり感情でしかってしまう (4) ・ 体調や疲れでイライラする (1) ・ 子どもの声に対する近所の苦情を気にして叱ってしまう (1)	6	(10.3)
< 母親としての自信のなさ > ・ 親としての包容力に自信がない (2) ・ 周囲の人の援助で育児をしている、一般的な父母とは違うのではないかと不安 (1) ・ 子どもが私の言動にそっくりな行動をとると、自分の人間性の不備な点を見せられる (1) ・ もともと子どもが嫌い、愛情不足になっていないか心配 (1) ・ 自分の都合で子どもに負担をかけている (1)	6	(10.3)
< 上の子に関すること > ・ 下の子が生まれて上の子がストレスを感じている (3) ・ 上の子ばかり叱ってしまう (2) ・ 叱りすぎた第1子の育児を後悔 (1)	6	(10.3)
< 周囲の干渉 > ・ 義父母と意見が合わない (5) ・ 実の両親と意見が合わない (1)	6	(10.3)
< 自分の健康に関すること > ・ 育児による慢性的疲労感 (2) ・ 自分の体調不良 (2) ・ 第2子を妊娠中、思うように相手をしてあげられない (1)	5	(8.6)
< 子どもの性格に関すること > ・ 集団になじまない、人見知りをする (5)	5	(8.6)
< 夫に関すること > ・ 夫が育児に非協力的 (1) ・ 父親が子どもと一緒にいる時間が少ない (1) ・ 夫婦の時間が持たない (1) ・ 夫が子どもに気に入らないことがあるとひどく暴れる (1)	4	(6.9)
< しつけに関すること > ・ 食事のしつけ方がうまくいかない (2) ・ しかり方、賞め方がわからない (2)	4	(6.9)
< 子どもの健康・発育に関すること > ・ 保育園で病気をもらってくる (1) ・ 子どもが超未熟児、退院後病院以外で相談できる窓口がほしい (1) ・ 次男の発育が遅れていることが心配、他の子と比較してしまう (1)	3	(5.2)
< 子育て環境 > ・ 子連れでの食事や買物に不便を感じる (2)	2	(3.4)
< その他 > ・ 自分の時間がない (1) ・ 母子密着が心配 (1) ・ 母子家庭、将来が心配 (1) ・ 友人がいない (1)	4	(6.9)

れてない状況を述べたものもあり、葛藤を抱えながら両立しようとしている様子がかがえた。

『育児ストレス』では、「イライラして怒鳴ったり、感情で叱ってしまう」、「近所の苦情を気にして叱ってしまう」など子どもを叱ることのみの記述になっていた。しかし同時に、「自分の感情のコントロールが難しい」、「子どもに対して申し訳なく、自分自身に困っている」、「子どもと同じレベルで言い合いをしている自分に気が付く」、「自己嫌悪」など、叱る自分にとまどいや罪悪感を述べているものが多かった。『母親としての自信のなさ』に関する記述では、「包容力に自信がない」や「一般的な母親と違うのではないかと不安」など、子どもの反応より自分自身の見方での判断であった。

また、『上の子に関すること』、義父母や自分の親と意見が合わないとする『周囲の干渉』、『夫に関すること』など、家族関係の調整の難しさやサポート者との関係の問題が認められた。さらに、『子どもの性格に関すること』、『しつけに関すること』、『子どもの健康・発育に関すること』など、幼児期になって現れる子どもの心配が述べられていた。

5. 18か月父親群における「生活の変化」への考え
父親自身が育児により関わるためには、「生活のどのような点が変わるとよいと考えるか」についての回答総数134件については、表6に示すとおり9項目に分類できた。『労働時間の短縮』が39件(29.1%)と最多で、『労働条件(環境)の改善』が35件(26.1%)と、労働の改善を求める

表6 18か月父親群 育児に関わるための生活の変化

変化すればよいと考える点 (総数134件)	実数	(%)
<労働時間の短縮> ・ 現在よりも早い帰宅時間 ・ 残業の削減 ・ 規則的な帰宅時間	39	(29.1)
<労働条件(環境)の改善> ・ 確実な休暇の取得 (17) ・ 職場の同僚・上司の理解 (6) ・ 給与の充実 (3) ・ 柔軟な勤務体制 (3) ・ 社内保育の設置 (2) ・ 単身赴任や出張回数への配慮 (2) ・ 育児用特別休暇の制度 (1) ・ ポストへの配慮 (1)	35	(26.1)
<自分自身の考えに基づく生活の変化> ・ 現状の中で時間の使い方を工夫する (12) ・ 育児に合わせた生活の調整 (8) ・ 親としての自覚を持って行動する (2) ・ 仕事より家庭を重視する (2) ・ 健康であること (1)	25	(18.7)
<社会全体の意識の変化> ・ 男女平等参画社会への変化 (5) ・ 育児期の労働者への配慮 (4) ・ 公共の場の育児への配慮 (1)	10	(7.5)
<行政の企業への指導> ・ 労働条件等の法的介入や審査 (5)	5	(3.7)
<公的補助の増加> ・ 育児に関する経済的支援 (3)	3	(2.2)
<社会資源の改善> ・ 育児支援窓口業務の充実 (1) ・ 利用しやすいベビーシッターの増加 (1)	2	(1.5)
<妻の意見>	1	(0.7)
<変化の必要は感じない>	14	(10.4)

意見が半数以上を占めていた。労働時間の短縮としては、「帰宅時間を早める」と「残業の削減」とするものが多く、労働条件では完全週休二日制や有給休暇の消化などの「休暇の確実な取得」、「家庭より仕事優先の考え方を改善し、育児のための休暇をとりやすい職場の雰囲気（同僚や上司の理解）」が望まれていた。また、フレックスタイム制や仕事の調整がしやすい柔軟な勤務体制が挙げられており、乳幼児を持つ社員の急な休暇への対応が可能になる労働環境を望んでいた。

また、『自分自身の考えに基づく生活の変化』としたのは、父親自身の取り組みを挙げたものであり、25件（18.7%）であった。「現状のなかで可能ななかたちで子どもと過ごす時間の工夫」や「仕事より家庭を重視」するなどが挙げられてお

り、「住まいや職場を変更する」ことを検討している記述もあった。

次いで『社会全体の意識の変化』10件（7.5%）で、「男性が育児休暇を取りやすい社会環境」や、「女性の社会的立場の確立」など男女平等参画社会への実質的な変化を望む意見や、「仕事重視の社会から、少子化対策としての育児へ配慮したゆとりある社会（育児期の労働者へ配慮ある社会）」を望む意見であった。一方、「変わらなくてもよい」は14件であった。

6. 育児支援サービスへの意見・要望

1) 母親群の育児支援サービスへの意見・要望

母親の育児支援サービスへの意見・要望は、図1に示した。4か月群・18か月群の両群をあわせて最も多かったのは、『保育所』に関する

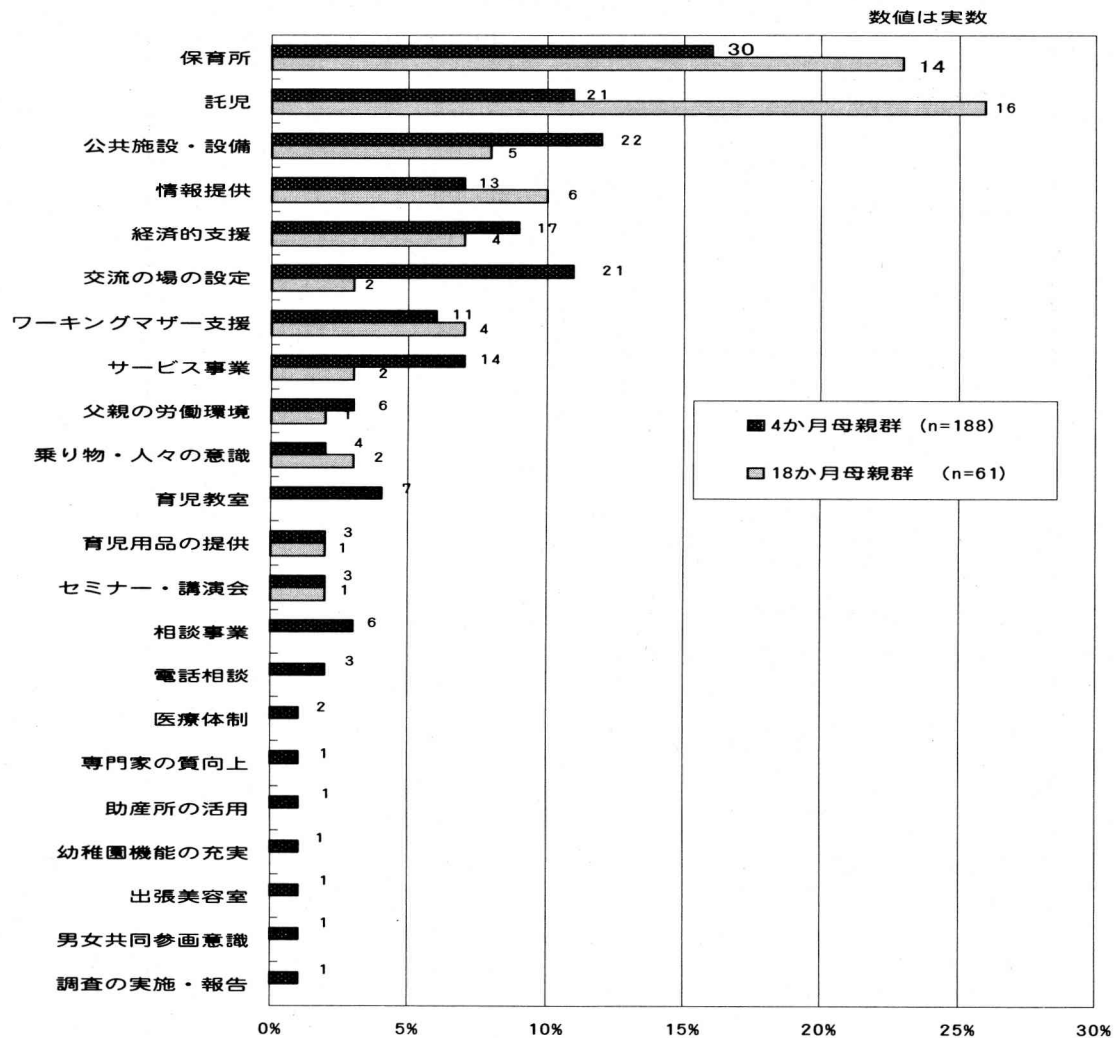


図1 4か月・18か月群 母親の支援サービスへの意見・要望

意見・要望であり、4か月群では「公立の保育施設が不足している、料金が高い、夜間（24時間）預かってくれる施設の充実」のほか、「子どもが病気になったとき預かってもらえると安心して働ける」など、施設数や料金以外にも保育時間やサービス内容について述べられていた。18か月群では、利用しやすい料金設定についてと託児としての機能を望む声があった。また、現在行われている一時保育事業に対して、「実施保育所が少ない上に、2週間の限度でしかみてもらえない。」との意見があり、施設数と期間の拡大が要望されていた。

次に多かったのは『託児』であり、とくに18か月群での要望が高かった。4か月群では、「親が病気の時、ベビーシッターなど安く利用できる制度がほしい。一時保育では保育所までの送迎が病気の体にはづらい。」と、病気や緊急時に低料金で気軽に利用できることを希望するほか、母親の息抜きに利用したいとしていた。また、兄弟がいる場合に、健康診査や予防接種の会場等への託児機能が望まれていた。18か月群では、「利用のための理由に制限がなく、気軽に利用できるようにしてほしい」や、親のための託児つきのサークルや教室への要望があった。

『公共施設・設備』への意見では、4か月群で、ベビーカーが通りやすい歩道やスーパーの通路、多くの場所にベビーカーの設置、授乳やオムツ交換場所の増設などであった。18か月群では、親子が楽しめるスペースを望む声があった。

『情報提供』としては、一時保育の一覧表や「近くの保育所の定員や金額、条件、空き状況などを定期的に知らせて」と保育に関する情報、18か月群では幼稚園に関する情報、さらに、育児サークルやイベント等の地域に密着した情報などのサービス提供についてであった。

『経済的支援』では、医療費助成や児童手当の所得制限の廃止やチャイルドシートのための補助金の要望があった。母親同士の『交流の場の設定』では、「同じ立場の母親達と話すことは気分転換になる、地域の近いもの同士で話を

する機会を作ってほしい」というものや、異年齢の子どもと接する場所や機会への要望もあった。

『サービス事業』では、豊富なメニューとして「年齢別にいろんな種類」をそろえ、「子どもを育てるには無気力だったり成長してない人たちへは、積極的にサービスするくらいがいい」という意見もあった。

『ワーキングマザー』への支援では、社内保育や公立保育所の時間外をサポートする保育ママの情報や、「保育所の送迎や（残業ができない）子どもが病気のときに休むことを負い目に感じないで働ける支援がほしい」、「障害児の保育を現実可能にしてほしい」などであった。

2) 父親群の育児支援サービスへの意見・要望

父親で最も多かった意見・要望は、4か月群・18か月群ともに『経済的支援』と『保育所』に関することであった（図2）。

経済的支援では、母親と同様、助成金の所得制限の廃止や児童手当の増額、チャイルドシートの助成であった。18か月群では、医療費の無料化や自治体による医療費の負担の差を無くしてほしいという要望があった。医療費に関しては、社会としての医療費削減を理解した上で、「病気ともなれば素人では容易に判断し難く、通院を抑える気持ちが結果として不幸となるのではないか」としていた。

保育所については、増設、利用しやすい料金、入所時期や入所条件の緩和、時間の延長への要望が多かった。18か月の父親に、「今のままでは育児は女性の仕事になってしまう、社会的保育という考え方で保育所の充実を」という意見があった。

『サービス事業』については、4か月群では、核家族へ対応できるきめこまやかなサービス内容への要望があった。産後の家事のほか、小さい子どもが複数いるときの病院受診への送迎サービスや買物の代行等である。18か月群では、家事支援サービスや保健師が巡回して相談にのるような、夫が育児参加できない面を補うような内容が目立った。

『情報提供』は、事業内容の案内と託児や医

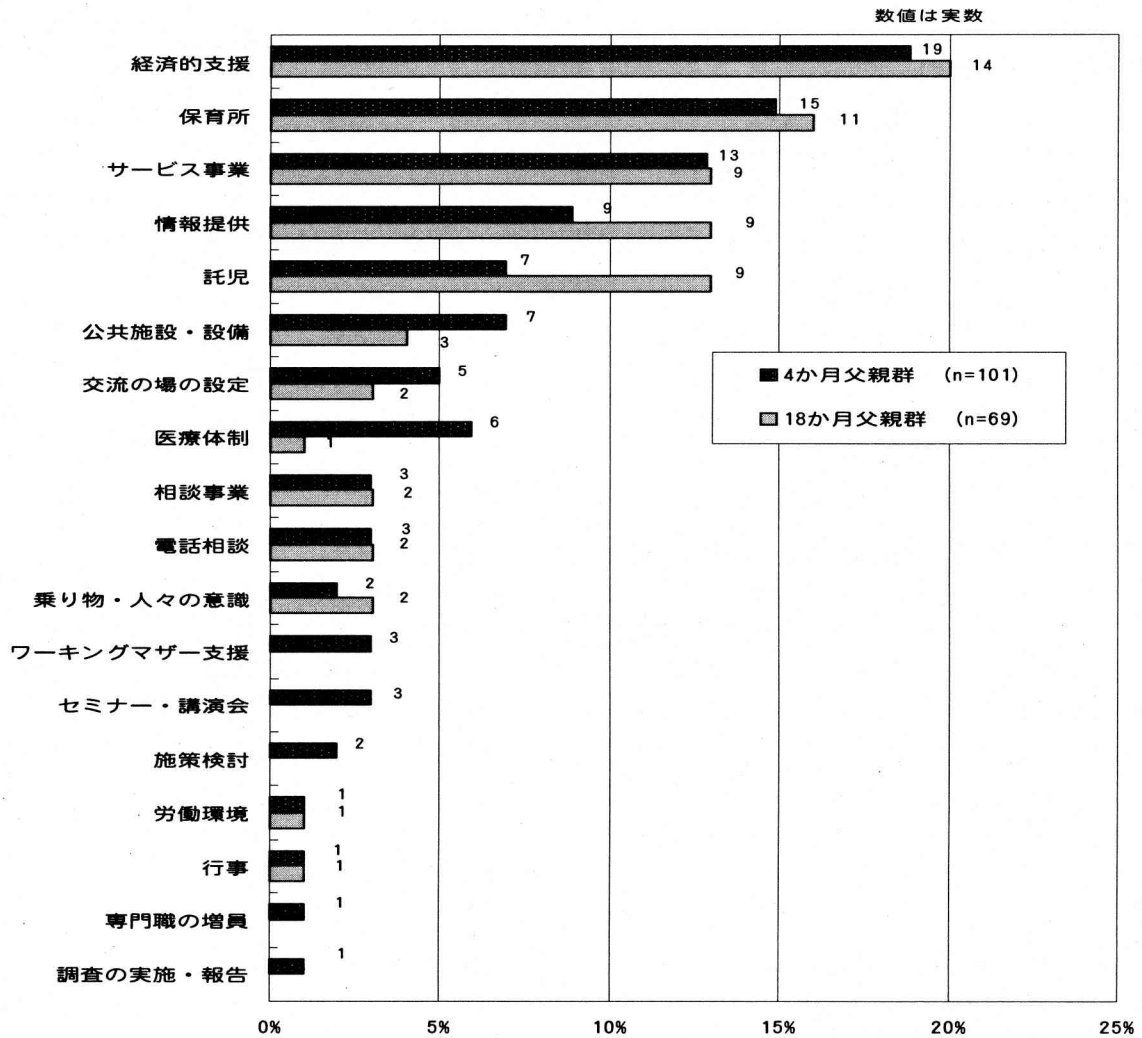


図2 4か月・18か月群 父親の支援サービスへの意見・要望

療に関する情報提供を望んでいた。『医療体制』への要望としては、24時間対応や電話医療、訪問医療などの記載があった。また、数は少ないが、父親への育児支援よりも母親同士の『交流の場の設定』、『ワーキングマザー』支援のように、母親のためのサービスを希望していた。

IV 考 察

- 4か月児の母親の育児困難と育児支援サービス
4か月群の母親では、夜泣き、なぜ泣くのかわからない・泣きやまないなど、「児の泣きに関すること」が育児困難として最も多くあげられ、次に「病気や症状に関する知識や対応」であった。乳児の泣き声に対する親の認知について神谷⁵⁾は、泣き声の生起原因の類推において「わからな

い」を選択している母親ほど、泣き声をネガティブなものとして認知し、また、母親の泣き声に対するネガティブな認知は、育児生活へのストレスとも関連していたことを報告している。また藤田⁶⁾は、乳児をもつ母親の児に対する憎らしい感情について、「泣く時」と「寝ない時」が多かったことを示している。今回の4か月群の母親は、約85%が核家族であり、78%が専業主婦であることから、昼間はひとりで、夜は夫と二人で児の世話をし、泣きへの対応がうまくできない場合には負担感が大きいと考えられる。「ひたすら抱っこして落ち着くのを待つ」のほか、「時がたつにつれなぜ泣くのか分かるようになった」のように対処していたが、乳児期は、「泣き」によって子どもから親への意志伝達を行い、親はそれに対処

行動をとる相互交渉によって関係を発達させていく時期である。産後の早期より、母親がわが子の泣き声を聞き取り、子どもの状態をよく観察して対処する行動を発達させるための援助が必要と思われる。

「病気・症状に関して対応できない」ことでは、多くが受診することで対処していた。しかし、受診するほどの症状ではない、風邪・湿疹・便秘・授乳後の嘔吐で専門家に相談したものは、2名のみであった。新生児期においては、分娩施設における入院中の指導や新生児訪問指導、1か月児には、医療機関における健康診査が実施され、それ以降の保健医療者との関わりは、3～4か月児健康診査までほとんどないのが通常である。電話相談や訪問指導なども実施されているが、気軽に相談できるようなアナウンスや訪問体制を充実していく必要があると思われる。また、周囲に夫や親、友人等の相談できる存在があれば孤立しないで対処していることから、妊娠中からサポート体制を整えていけるような働きかけと仲間作りの機会を数多く提供していくことが大切である。

江守⁷⁾は第二子の出産後0～10か月の母親は第一子にかかる関心、労力、時間の比率は第二子よりも大きい傾向がある、と報告している。今回の調査でも複数の子どもをもつ母親111名から、上の子の対応について35件の記載があり、上の子の反応や対応に困っている状況がうかがえた。大月らの報告⁸⁾では、第二子出生に伴い家族の一時的な混乱、あるいは3～4か月の時点で継続して混乱がみられても、安定へと適応していった家族は、妊娠中から上の子に胎児に関心をもたせ、育児に参加させていた。このことから、複数の子どもをもつ母親に対しては、上の子と下の子の相互作用を促すことができるような支援が必要である。

育児負担感に関する研究で池田⁹⁾は①体を休めることができない②気持ちを休めることができない③自分のための時間がない④子どもの世話のために家事を思うように行なうことができない、の4項目に対する負担感で育児負担度が測定できることを検証した。4か月児の母親の「最も困ったこと・つらかったこと」への回答のうち、分類された15項目のうち5項目『体調不良時の児の世話』、

『育児のストレス』、『睡眠不足』、『自分の時間がない』、『産後のサポート』の合計67件(29%)が池田の4項目と同じ内容を含むと考えられる。このことから、今回の調査では回答した母親のうち約3割が負担感を強く感じていることが推察できる。

4か月児の母親から出された支援サービスへの意見・要望の上位1位から4位は「保育所」、「公共施設・設備」、「託児」、「交流の場の設定」の順であった。このことは、復職を考えて仕事をしながら子育てする環境整備への強い希望であることを示しているが、上記の母親の体験している育児困難の解決に向けての意見要望であるともいえる。核家族で、専業主婦が多いという特徴から、日中は母親がひとりで家事・育児を行い、母親自身で心身を十分休めることができず、直面する子どもの泣きや症状に身近に相談相手をもてず悩んでいる様子がうかがえた。子ども連れで利用しやすい施設は、家庭から出て母親が仲間を得て育児の悩みを相談したい、情報を得たいなど、母親なりの解決へのきっかけを求めている姿であるといえる。母親の自立を助ける支援として、このような施設の充実や交流の場の設定・提供は重要である。子どもを育児の専門家に任せて母親自身が心身を休める、自分の時間を確保してリフレッシュする、などちょっとした託児の利用は育児の負担感を軽減することに有効である。また、平成13年度からS市で実施している、産後1か月以内の体調不良や育児困難な家庭に対して家事援助や育児相談にのる「産後ヘルプサービス」は、開始から半年で延べ590回(1600時間以上)の利用があり¹⁰⁾、新生児を持つ母親への有効な育児支援として、今後ますます需用が増すものとする。

今回の調査は自由記載であったことから、件数は少ないが、育児ストレスについての記載量と内容の深刻さから、迅速できめこまやかな、柔軟性のある個別的な対応サービスを整備し積極的に進めていく必要性を強く感じた。この点は母親への支援として父親からも要望があった。特にS市の特徴として転勤族の割合が多く、転入出のサイクルが短いこと母親の仲間づくりは容易ではないことがうかがえる。このような点から個と集団の2

本立てのサービスが必要である。

2. 4か月児の父親の育児困難と育児支援サービス

子どもと生活を共にしている父親で今回の対象のように核家族（83％）である場合、育児を避けることは不可能である。父親があげた育児困難も「泣きに関すること」、「病気や症状に関する知識や対応」の上位2項目は母親と同様で、全体の半数以上を占めていた。とくに児の「泣き」が多いことが注目される。「泣かれて困った」時、約3割の父親は自分で何とか対処しようと試みているが、妻に任せてしまう父親や、妻がいない場合にはひとりでは対処できないものが多かった。父親が積極的に育児に参加できるよう、自治体や医療機関においては両親教室などの父親向けの子育て教室が実施されてきており、父親の参加率は年々増加している。平成13年度のS市の両親教室への父親の参加率は母親教室参加者の24%にあたる¹⁰⁾。しかし、今回の調査ではこれらの教室に関する意見・要望は少なく、情報として、「パパの育児体験記」や育児マニュアルを希望する意見があった。父親向けの教室は妊娠期を対象としたものが多く、また開催情報が父親に行き渡っていないことが考えられる。育児期の父親を対象としたメニューも設定し、仕事をしながら学習していく立場を考慮した日時・場所、育児の実感が湧く参加・体験型の展開などを工夫していくことが望まれる。また、「病気や症状に関する知識や対応」については、困ったこととしてあげつつも、父親は適確な判断で対処しているものが多かった。

回答した父親の約1割が「仕事と育児の両立」を困難としてあげており、仕事が忙しく妻をサポートできないことや、育児のために仕事が思うようにできないことのジレンマを述べていた。母親は育児と家事の両立が難しい場合、実家の援助を受ける、周囲に相談する等の対処方法をとっていたのに対して、父親は自分で仕事を調節する、自分で妻をサポートする等ひとりで対処しようとする傾向がみられた。そこで、父親自身が育児に協力したくてもできない部分をサービスで補ってほしいという「サービス事業」への要望が多かった。特にS市では転勤族が多いため、実家が遠方・知り合いが少ない等の母親自身のサポート体制が整っ

ていない場合に、母親や子どもの病気等、急な対応が必要な時に父親自身が対応できないことへの心配から、母親よりむしろ父親からの要望の割合が多かったと考えられる。

育児困難にはあげられていないものの、父親の意見・要望においては「経済的支援」が最も多かった。父親の年代が若いほど経済的な支援を望む¹²⁾といわれるように、乳幼児期の育児に経済的な負担感が強いことを示している。また、母親同様に「保育所」への要望が多くあげられていることは、共働きを考えている現れと推測できる。

3. 18か月児の母親の育児困難と育児支援サービス

18か月児の母親では、育児・家庭・仕事の両立を困難とするものが最も多かった。エンゼルプランの施行から現在までに保育施設や託児環境は整備されつつあるが、厚生労働省児童家庭局保育課によれば、平成13年の政令指定都市の保育所入所待機児童・平均待機率は4.3%であり、S市の待機率は6.8%で保育所に入所できない児童の割合が平均より多い。平成12年の7.8%から改善されてはいるが、料金の設定や利用条件、保育内容等については、さらにニーズに合った整備が急がれる。

この時期の母親で、復職したものの、仕事をもち始めたものは、育児のために仕事を調整しなければならぬことに負い目を感じ、職場の中で孤立している状況がみられた。佐々木らの調査¹³⁾でも、常勤の母親は子どもの病気等、突発的な出来事に対する職場の調整に難しさを感じており、育児と仕事を両立するために身体的負担はもちろんであるが、精神的ストレスを感じていることが推察される。三橋ら¹⁴⁾は、働く母親の労働時間と残業が役割葛藤に関連し、働く理由や就業意欲といった仕事に対する認識がストレス状況に関連すると報告している。「情報提供」への要望が保育所・託児の整備に続いて多くあげられたことは、働く場等広く社会とのつながりを求め、保育情報等を望んでいると考えられる。女性が働くことの意味は経済的な理由だけではなく、個人の多様な生き方のひとつとしてとらえることもでき、働く母親への支援は、安心して就職活動や仕事を継続していくための短期・長期の託児や保育の機能を関係機

関に整備していくこと、さらに、仕事と育児の両立に対する母親自身の認識を考慮した、個別的な支援が必要であろう。

次に困っていることとして、「育児ストレス」や「親としての自信のなさ」が上位にあげられた。18か月の子どもは成長発達の段階からみて、行動が活発になる・自我の芽生えによって自己主張する等の年代に入る。桑名¹⁶⁾は今回の対象者の育児ストレスを分析し、4か月児の母親においては児の特性は育児ストレスに関連していないが、18か月児の母親においては、児の性別と出生順位が母親のストレスへ影響する要因であることを明らかにした。児が男児で第一子である場合は、母親自身に関わるストレスを高めるように影響し、さらに母親役割を消極的・否定的に受容する意識につながることを示している。育児ストレスを反映してか、18か月児の母親のサービスへの要望は、託児を利用して母親自身が息抜きできるような支援が多く望まれていた。また、子どもの活動の拡大から、周囲のものが育児に干渉する機会が増え、実父母や義父母と育児の考え方や意見が合わないことが精神的ストレスとなっていた。母親が自信を持ちにくい時期であるため、母親を肯定するような周囲のサポートが重要であり、父親教室・祖父母教室では母子を支える役割としての家族のあり方について支援する事が重要である。

4. 18か月児の父親の育児支援

仕事よりも家族を大切にしたいという傾向は年々強くなってきており¹⁶⁾、今回の調査でも18か月児の父親が育児に関わるための生活の変化として、労働条件の改善を求める意見が半数以上であった。また、企業の方針に頼らず自分自身の考えに基づき、自分から環境を変える、時間の使い方を工夫するという意見は、変化の必要性を感じない父親よりも多かった。このことより、企業の方針次第という受身的な姿勢がある一方で、自分から仕事環境を選択し変わっていかうとする姿勢もあり、積極的に育児へ参加したい父親には、選択肢として多様な職場のあり方が望まれる。大藪ら¹⁷⁾は、「母親の育児満足感を中心とした養育意識に影響するのは、父親の家庭中心志向要因であり、仕事中心志向要因からの影響はほとんどない」と報告

している。父親が家庭における家族との生活を重視しようとすることは、母親の精神保健上好ましいことであり、家庭を大切にしようとしている父親の姿勢を認め、さらに意識を強化していくような支援が父親教室などにおいて必要である。

4か月児の父親と同様、支援サービスへの意見・要望では「経済的支援」、「保育所」、「サービス事業」の順に多い。父親が育児に参加できない部分を補う内容を希望していることから、家庭で不足する育児力を社会でカバーしてほしいということである。父親の育児参画、男女平等参画社会に向けた啓発が進められ、平成14年4月からは育児・介護休業法が改正されたが、一般の職場で父親の育児休暇の取得や育児のための遅刻・早退が抵抗なく受け入れられる環境とは言い難い。職場の環境が改善されるまでせめて支援サービスで補ってほしい、ということの現れでもある。

家庭での育児代行をするようなサービスも緊急措置的に必要であるが、父親の要望の背景にある職場環境問題の解決を図ることが同時に必要である。現在ファミリーフレンドリー企業を奨励する助成制度の奨励等行われているが、これまで以上に行政が積極的に企業へ働きかけていく社会的支援施策が望まれる。

「託児」と「情報提供」の要望も多くみられた。子どもの発達段階の特徴から、母親にストレスが増すことから、子どもを預けて妻が自分の時間を確保したり夫婦で過ごす時間を持ち、育児ストレスを解消するための手軽に利用できる託児制度が望まれている。また、この時期の子どもにとって父親は遊び相手としての存在でもあり、子どもと遊べる場や施設についての情報を求めている。子どもの成長発育に応じた父親への情報提供は、父親の育児参加を促進するものと考えられる。

V まとめ

宮城県S市における乳幼児の母親と父親を対象とした育児ストレスに関する質問紙調査から、自由記載項目の内容を分析し、直面する育児困難と育児支援サービスへの要望を分析した。

4か月群における育児困難は、母親と父親ともに上位に「児の泣きに関すること」(母親:16.9

％、父親；36.0％）、「児の病気や症状に関する知識や対応」（15.2％、19.0％）をあげており、母親では「上の子への対応」（15.2％）も多かった。18か月群の母親では、「育児・家事・仕事の両立」、「育児ストレス」、「母親としての自信のなさ」があげられた。育児困難への対処は、多くが夫婦で協力し、実家や友人のサポートを得て対応していたが、児の症状や育児不安については保健医療者の活用もあげられていた。しかし、児の泣きへの対処や母親が不在時の児の世話ができない父親が多く、父親への保健教育の必要性が認められた。

育児支援サービスに対しては、4か月群の母親では保育所に関する要望が最多で（16.0％）、次いで公共施設の設備であり、18か月群の母親では託児（26.2％）、保育所であった。父親では、両群ともに経済的支援（4か月群；18.8％、18か月群；20.3％）への要望が高く、自分がより育児に関わるためには労働時間の短縮、労働条件の改善を求める意見が多かった。これらより、家庭における児の養育への援助とともに、社会全体で育児支援をすすめる必要性が確認された。

本調査は、4か月群と18か月群の調査地域が一部異なることから育児支援としての社会資源の量や内容に差があることを考慮する必要があり、また横断調査であることから、子どもの成長や親自身の経験の積み重ねによる育児困難の内容の変化や対処方法について言及するには限界がある。

本報告は、科学研究費補助金によって行われた基盤研究（C）（2）課題番号10672248の一部である。

文 献

- 1) エンゼルプラン関連施策研究会編集：エンゼルプラン関連施策ガイドブック、中央法規出版、2002
- 2) 桑名佳代子、桑名行雄、坂上明子他：母親役割への適応を支援するためのプログラムに関する研究、平成10年度～平成13年度科学研究費補助金〔基盤研究（C）（2）〕研究成果報告書、5-127、2002
- 3) 桑名行雄、桑名佳代子、坂上明子他：乳児期における父親の育児役割とストレス、宮城大学看護学部紀要、4（1）、74-84、2001
- 4) 川喜田二郎：発想法 創造性開発のために、中公新書、70版、1996
- 5) 神谷哲司：乳児の泣き声に対する親の認知と対処行動、家族心理学研究、13（2）、103-114、1999
- 6) 藤田麻美、飯田美代子、前嶋七海他：乳児を持つ母親の児に対する憎らしい感情に関する研究、母性衛生、42（4）、539-544、2001
- 7) 江守陽子：第二子出産後の母親の二子に対する養育比率と第一子に対する態度の変化、母性衛生、42（1）、60-67、2001
- 8) 大月恵理子、森恵美：第2子出生に伴う家族の適応過程、日本母性看護学会誌、2（2）、31-40、2002
- 9) 池田浩子：育児負担感に関する研究－育児負担感の時期別変化と母親の心理状態の関連－、母性衛生、42（4）、607-614、2001
- 10) 仙台市健康福祉局：健康福祉局事業概要、仙台市福祉局総務課、2002、8月
- 11) 前掲10)
- 12) 蛭田由美他：父親の子育て支援に関する研究、母性衛生、42（2）、386-393、2001
- 13) 佐々木綾子、田邊美智子：母親の育児支援に関する基礎的研究（第1報）－保育園児を持つ常勤の母親の育児環境および仕事と育児の両立に関する意識－、日本母性看護学会誌、2（1）、27-38、2001
- 14) 三橋邦江、森恵美、前原澄子：働く母親の適応に関連する要因の分析、日本看護科学会誌、19（3）、1-10、1999
- 15) 前掲2)
- 16) 厚生省監修：平成10年版厚生白書、ぎょうせい、1998
- 17) 大藪泰、前田忠彦：乳児をもつ母親の育児満足感の形成要因Ⅲ－父親の仕事中心志向と家族中心志向の効果－、小児保健研究、56（1）、54-60、1997